ひまわりからのメッセージ

95号
2019.5.13.
NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

紫蘭の花咲く頃に

改元に伴う十連休が終わり、日常が戻ってきました。連休明けに子どもたちは学校に行けたでしょうか。心配しています。

ところで、我が家の庭の雑草の中で紫蘭が咲きはじめました。紫のものと、白花があって、この花が咲く頃になると、私は一人の先生のことを思い出します。

小学校時代、体が弱かった私は、今では考えられませんが、すごく泣き虫でした。だから「泣き虫、毛虫、はさんで捨てろ!!」などと男の子たちから、よく言われたものでした。

四年生になった時、はじめて男の先生が担任になりました。小竹先生というその先生は、花が好きで、学校の花壇に様々な花を植えておられました。その頃、学校には鳥小屋もあり、セキセイインコや文鳥などもいて、先生は、その世話もなさっていました。

私は先生のあとにくっついて、先生がなさっていることを見ているのが好きでした。今のように集団下校などということはなく一度帰宅してから学校へ遊びに行くことも許されていた時代でした。先生は草や花の名をいっぱい教えて下さいました。

ある日のこと、先生は紫の花を指さして「この花の名、知ってるか？」と、たずねられました。「知らん」と私は答えました。すると先生は「おお、そうだよ。あたりだ。この花はシランと言うんだ。よく知ってたな」と、大声でお笑いになりました。その時の花壇の位置も、シランの紫の色も、先生の笑顔も私の記憶の中に鮮明に残っています。

皆さんには、そういう思い出はありませんか？

私は二年生の時に、いわれのない罪をきせられ、先生に責められ、幼な心に負った心の傷は、ずっと残ってはいますが、幸いにもその後、すばらしい先生方に出会えたことで、信頼感を取り戻すことができました。小竹先生との出会いも草花を通して、私の精神世界を広げて下さったと言えるでしょう。

学校訪問をしながら、手のかかる子や障がいをもつ子、発達特性ゆえに困っている子たちを見るにつけ、先生方の心の有りようも垣間見え、先生方の子どもに対するいつくしみが、きっと子どもたちの力になっていくだろうと確信しています。

幼い記憶は、一瞬のひとことも憶えているものですから……。

ことばの使い方は会話の中で学ぶ

もう千年位前、発達障害者支援法が制定され、県に発達障害支援センターができて二、三年たった頃、色々な市町の保健師さんから、「一歳半健診で発語のない子が五割以上になっています」という報告を受けました。

幼児が「マンマ」「ブーブ」など有意味語を話すようになるのは、独歩ができた頃で、大体一歳三ケ月位だというのが定説だったのに……。

子どもの世界で何が起きているのだろう、母と子の関係や家族のかかわりに何か変化があるのかと不思議に思ったものです。

発語が出てくるには、口腔機能（口のまわりなどの筋肉や舌の動き）聞く力、言語理解、人と人との関係、相手に自分の思いを伝えたいという気持ち等々様々な力が育ってこないと、うまく話せるようにはなりません。子どもが示す指さしや手さし、音声などに対して、そばにいる大人がどのように応じてくれるのかが、実はとても大切なことなのです。

働く女性が増え、ママと赤ちゃんのコミュニケーションは、変化してきているでしょう。早くから保育所に預けて働かざるをえない若いママたちも多くなってきています。しかし、保育所で一対一の関係性をもっていくことは、殆ど不可能に近いでしょうからそんな社会情勢も子どもの発語の発達に関係してきているのかもしれません。

そして、スマホの普及は、ますます母と子のコミュニケーションの機会を減らしていくことにならないか、心配しています。

幼児期の発語の遅さが、そのまま子どもたちの語いの獲得や、言語表現の難しさにつながっているとは言えませんが小学生の学習面や友だち関係の中に、ことばに関する困りを見ることが多くなったのも事実です。

三歳になると、理解、表出ともに語いが著しく増加します。反対語がわかってくるのもこの頃です。大きい－小さい、長い－短い、高い－低い等、反対語としては「ない」をつけて「大きくない」という言い方をします。そして、否定語に「ない」をつければいいというルールを知ると、本当は「～ではない」と表現しなければならない形容動詞にも「ない」をつけて「好きくない」「きれいくない」等と表現したりするのです。

構文も徐々に発達してきますが、三歳では、助詞の使い方は十分ではありません。助詞を理解して文理解ができるようになるまでには、段階をふんでいきます。林部英雄は、「こ

とばの心理学」の中で、文理解の段階として、自己中心的（文中の行為者が全て自分であると、とらえる）→意味的→語順→助詞へと進むのだと言っています。つまり、助詞を手がかりにした文理解ができるまでには、最初は、文の行為者が自分であるとする自己中心的な段階があり、次に自分の経験や知識に基づいた理解の段階があり、その後に語順を手がかりとして理解する段階を経るということになると考えられます。

そして、助詞の使い方にも、もちろん段階があります。三～四歳になると、「～（すれ）ば」という仮定の表現も現れてきます。「もし」や「～なら」「～（すると）」という条件を表す接続助詞も使えるようになってきます。

このように語いも増えて、大人との会話がスムーズになってきます。三歳児では二～三文節だったのが四歳児では三文節が多くなり、ことばによる理由づけも可能になり、五～六歳以降では適切な会話ができるようになってきます。適切な会話というのは、話題を相手と共有し、相手のことばをその場面に応じて解釈しなければなりません。それは、単にことばを知っているということとは違います。「お風呂、見てきてね。」と言われたら、お湯が一杯になっていないか確かめて「一杯だったら水道を止めて来てね。」ということですよね？「ウン、見てきたよ。」ではないわけです。「お父さんに新聞を持っていってあげて。」と言われて古い新聞をもっていってもダメなわけです。今日の新聞を持っていくように言われているわけですから……。

つまり、子どもたちは、会話を通してことばの使い方を学んでいくのです。大人との会話自体が学習の場であると言えます。しかし、もしも家庭の中で会話が余りにも少なかったらどうなるでしょうか。

ただ、子どもたちの中には、ことばを具体的に言ってもらわないと理解できない子どもたちもいます。先生が熱心に説明されていても「意味、わからん！」と言う子どもたちです。「もしも～したら……」「例えば……」等と説明を加えると、よけいに混乱してしまう子どもたちです。私たちはことばの世界に生きていますから、自分のことばが本当に相手に伝わっているのか、どの様に伝えれば相手（子どもたち）に伝わるのか、もう一度、大人の側が自分のことばを見直してみる必要があるように思います。

家庭では、親子の会話を大事にしていただくこと、そして学校では、目の前の生徒の語い理解やことばの使い方の理解の程度をふまえて話して下さることが必要でしょう。今後、子どもたちの会話は、ますます貧弱になっていくのではないか……と私は憂いています。

ゲーム依存、ゲーム障害

ことばのことを書こうと、ここまで書き進んできたら、今朝の中日新聞の朝刊に「ゲーム障害」のことが載っていました。一歳にならない頃からスマホになじんでいる今の子どもたちにとって、いえ親世代にとってもスマホは手放せない存在でしょう。依存リスクの高いオンラインやスマホゲームは、今までのゲームのように「終了」「ゲームオーバー」がありません。ゲームにのめり込みやすいように作成されているのです。

私が相談を受けるお子さんの中には、昼夜逆転していたり、家族に注意をされると暴言、暴行におよぶ子もいます。特に発達障害をもつ子どもたちはゲーム依存になりやすいと言われてきましたが、小さい時から「スマホを与えておけば大人しくしているから…」と、家族の会話も少なく、ゲームで時間をつぶしていた子どもたちは、ゲーム依存になりやすいと思います。

子どもたちの脳は、未発達です。大脳辺縁系と呼ばれる部分は生命維持や本能をつかさどっています。一方、前頭前野と呼ばれる部分は思考や理性をつかさどっていますが、この部分の成熟は、脳の中でもゆっくりだと言われています。AD/HDの子どもたちが十歳位になると落ち着いてくると言われるのも、実は脳の成熟に関係しているからなのです。（特性を無視して誤った育て方をしてしまうと、二次的な障害を引きおこしますが……）

子どもたちが小さい時からゲーム漬けになると、脳のバランスが崩れ、気持ちのコントロールが難しくなります。単なるゲーム好きと依存状態の境界線は「自分でやめることができるかどうか」だと言われています。ゲームに熱中していても、家族に言われてやめることができれば、まだ依存には至っていないと言えますが、体力がついてきて、親の注意を聞かないということも起きてきます。そうなる前に親子で時間を決め、子ども自身が気持ちのコントロールができるように仕向けていくことが大切です。

生活リズムをくずさないように、睡眠も脳を育てるために大切なものであることを肝に命じて、子どもたちの生活リズムに気を配ってあげたいものです。

そして、子どもたちだけでなく、大人も、自分の生活をふり返ってみることも必要ですね!!

◎お知らせ

六月のセンター親の会は　中川ふれあいセンター

六月十日(月)九時三十分～十二時です。